

作文を書こう 10 (作文を支えるもの—視写と読書)

(保護者と児童・生徒へ)

ニュージャージー補習授業校(2012年9月29日)

本校の四百八十人の子ども達は、毎日現地校に通い、毎週土曜日には補習校に来て学習に励んでいます。子ども達の興味関心や得手不得手は、個々人によって様々です。

本校は次のような目的を持ち指導に励んでいます。

- ①国語(日本語)や算数(数学)、社会科の指導
- ②学習習慣の定着
- ③仲間づくりの実践

その目的を達するためには子どもたちの能力を最大限に引き出すことです。四百八十人の子ども達に、四百八十通りの「興味」と「自信」を持たせることです。根を養えば、幹と枝は自ずと成長します。

作文が書けるということは、自信を持って自分を語れるということです。

将来、子ども達が自立して生きていく上で、大切な能力であり技であります。

前号で、「作文教育の基礎は家庭です。」といたしました。そのため家庭で実施していただきたいことがあります。

【その一】 特に有効なのが、新聞のコラムの視写です。

該当学年は、初等部高学年(五年生・六年生)と、中等部の皆さんです。

「天声人語」などのコラムを、最初から一語一句、そのまま書き写します。句点「。」や読点「、」に気をつけて一心不乱に、ひたすら書き写すことに集中します。

我が国の「写経」という文化がありますが、その現代版です。難しい語句や漢字も出てきますが、

子ども達の頭を鍛えるのです。

薬でいえば漢方薬のようなものです。劇的には効きませんが、じわりじわりと効果を発揮します。毎日、書き写るときは、二十分止めめます。慣れるとスピードがあがります。漢字や言葉、文章のリズムなどが身につきます。ノートに書き、蓄積するので、努力のあとを目で見て確認できます。また、夏や冬の長期の休みに取り組んでも効果があります。やってみませんか？朝日新聞のコラム「天声人語」は、毎日毎日、十八文字×三十五行＝六百三十五文字で書かれています。原稿用紙で一枚半の文字量です。

【その二】 保護者も子どもと一緒に読書をしましょう。

読書は、知識を得たり、教養を高めたり、流行を知ったり、娯楽のために読みます。これはこれで素晴らしいことです。

作文教育は、子どもに「考える力」をつけるということですから、物語だけでなく理科や社会科、音楽、体育、算数など論理的に書かれた本に親しむことが必要です。

作文の基礎は家庭にあります。私も支援します。

天声人語

きょうから8月。この上旬に

没後50年を迎える有名故人が何人かいると、物知りの同僚に教わった。まず5日があつたマリリン・モンロー。8日は民俗学の柳田国男。そして9日はドイツの作家ヘルマン・ヘッセの命日なのだという▼おお、ヘルマン・ヘッセ！懐かしい名前はかつて、青春前期の必読書の響きがあつた。「車輪の下」「郷愁」「春の嵐」……。ヘッセを読んだことを多感な時期のささやかな記念にしている人もいよう。読書感想文の定番でもあつた▼この季節に思い出すのは「青春は美わし」という短編だ。夏休み、ふるさとに帰った青年が父母や弟妹とひと夏をすごす。昔恋した少女に再会するが愛は実らない。休暇は終わり、青年は夜空に上

がる火花を汽車から眺めて故郷を去っていく。詩情たただよう物語である▼流れるように過ぎる夏。青年は言う。「休暇といえは、いつだって前半の方が長いものである」。昔に読んで傍線を引いた覚えがあるのは、宿題をためる癖のゆえだったろう。8月に入ると、もう夏休みの逃げ足は速い▼月刊の文芸春秋が以前、宿題のやり方をタイプに分けていた。先行逃げ切り型は、7月中に全部終わらせて後は左うちわ。まくり型は、尻に火がついてから大車輪。他にコツコツ積み立て型、不提出型というのもあつた▼最後のは除いて、どのタイプにせよ、よく遊んで、よく学ぶ夏休みがいい。夏だけではなく、青春の逃げ足もまた速い。そんなふうに文豪ヘッセは説いている。